

定家家隆詞合

一名  
撰千番歌合

~ 4

1546



門八利  
號 1546  
卷



定家院隆誦命

御点 後鳥羽院  
一君撰五十番秋合ト云

一番

丸

中納言定家

里乃あまはれ 焼衣もらわのり  
年連もまらぬまはれらるわぬ

えの席并也里は海士也四の在所也  
わはあまを別もまらす別も事也  
坂梅もらわ別とまのわん也

右

後二位家隆

去もいさし也 年いああ美ああ也





三書

右

くふたせむしむらさきあまのつらみ  
らるる越路のうらむらさきあまのつらみ

西白のむらさきあまのつらみ

けむらさきあまのつらみ

しむらさきあまのつらみ

もむらさきあまのつらみ

左

むらさきあまのつらみ

あまのつらみ

あまのつらみ

あまのつらみ

三書

右

あまのつらみ

あまのつらみ

あまのつらみ

あまのつらみ

あまのつらみ

橋戸の石と去りて嘆みらて又嵐の  
嵐もくくふれゆくを吹らるす時言  
語同形  
わすみはむちぬ山乃あさわら  
後りやうぢぢとて去らん  
この物舟の歌也

右

今朝見きて来すは乃花をなすの  
うぢの去りたる庭に  
一夜落苑の楸より負むと風乃上也

ちとて風は下とて朝をきく庭乃  
り風の歌也

五書

右

若取川くさ乃日つは年あつて秋と  
くわくも去りてせとれは  
若取川を乃即来河らとる若取  
いづみせしとつあをえとる  
日取乃あつてとる若取川を乃即来  
る若取川を乃即来河らとる若取

去つては

右

高母のまやぶらりやみりーほら  
りーりー見ゆらまのちりー

捕た乃言妙く浦りの塩みちり  
けをわいーぬのちのちりて松  
をりーりー塩をー入る入る

六書

左

もみしゆく浅もれぬるのちり草ー赤

りりりり社越く去れりりりり

奥羽の藤ふじをりりりりりりりり

若を演秩とりの勢をりりりりり

射しこびりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりり

右

あー鴨乃阿とまけりりりりりり  
あけすみりりりりりりりりり

あゝ鴨のささく入口より後の  
をく復る糸我おも者か  
水は色若所也野たよりありて  
さほく入らるるをさくく鴨の端  
れは復もあはれおれらありて  
すみろく梅のさく我ははらへた  
世の復もあはれおれらありて

七書

右

外系ぬなるもゆめしきもたれきもつ尾り

きよはる(よ)もなむるも  
尾はる(よ)もなむるも  
かろ(よ)もなむるも

右

旗舟もしほはる(よ)もなむるも  
あちりておれらありて  
尾はる(よ)もなむるも  
かろ(よ)もなむるも  
あちりておれらありて  
尾はる(よ)もなむるも  
かろ(よ)もなむるも  
あちりておれらありて  
尾はる(よ)もなむるも  
かろ(よ)もなむるも

和よ月いあまのりして猶もや上下は句  
乃もむけりく鶯連り思むあはる藤の  
宿しあはれ類也

八書

左

あしう金たうりねのこころも  
みくはくあはるるまらあはる  
難けりうさうさうさうさうさうさ  
わしとあはるるさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさ

右

ふまは乃もふたうも葉も乱若  
し息葉よめはさみり秋のころ  
鳥の葉も若をほらぬさうさうさ  
しとさうさうさうさうさうさ  
あはる乃浮葉しみるさうさ

九書

左

うちなを冠く志けりうさうさ  
志し秋葉ほらぬさうさうさ





中山の秋無き風の婦人  
山家乃と由也夕日からの煉の香  
さゆ〜 承神

十一番

左

浪の阿ま乃を社か袖も去り礼勢  
きんも〜 大ゆらあ承神〜 風  
す〜 小〜 小〜 疎〜 枯風乃時  
あ〜 心〜 心〜 あり乃袖よ〜 承  
き〜 社勢

右

梅う勢〜 やさの習わ〜 び〜 光を  
〜 とも〜 ぬ〜 け〜 月〜 年  
あ〜 ぬ〜 こと〜 も〜 物〜 なる〜 梅〜 せ  
わ〜 け〜 け〜 け〜 け〜 月〜 も〜 出〜 せ  
た〜 け〜 け〜 け〜 け〜 承〜 神

十二番

左

あ〜 け〜 け〜 小〜 せ〜 深〜 身〜 け〜 け〜 露〜 色  
〜 け〜 け〜 け〜 阿〜 け〜 梅〜 乃〜 梅〜 乃〜 梅

あまのつらさのこころを  
あまのつらさのこころを  
あまのつらさのこころを

ち

くさくさのつらさのこころを  
くさくさのつらさのこころを

あまのつらさのこころを  
あまのつらさのこころを  
あまのつらさのこころを

十三番

左

浅茅生れ小端乃篠くさくさのつらさのこころを

あまのつらさのこころを  
あまのつらさのこころを  
あまのつらさのこころを

ち

はゆいこころのつらさのこころを

うしとく人森もあまうまのうらむ  
病の病もさくさく玉の袖もあけ  
うれを鳴りて玉の袖もあけ  
うらむあけ

十回書

左

うしとく人森もあまうまのうらむ  
病の病もさくさく玉の袖もあけ  
うれを鳴りて玉の袖もあけ  
うらむあけ

うらむあけ

右

みやん平らさくさく玉の袖もあけ  
うらむあけ

十回書

左

みやん平らさくさく玉の袖もあけ

じあーたうーの梅もあは月

月かまはけのうー物こそ思へん終

あふとみく月も物思ふらふら也

さね月もきき実らふすみいふいこ

右

くしあふふらうーいけんあふらうーあ

うあふらうーはらあふらうーあは月

あふらうーあふらうーあは月

あふらうーあは月

十の書

右

あふらうーあは月

あふらうーあは月

あふらうーあは月

あふらうーあは月

右

あふらうーあは月

あふらうーあは月

あふらうーあは月

あふらうーあは月

枯ひく成るる月かろ知あしらひ  
くあ有的乃教らるる花一跡  
きるる鹿の紅葉よりのや糸はらり  
おあくとはしし月かろ海はるるの

十七番

左

わく風り軟わし月乃くじく積く  
なううり人もらるるもこのあま  
空の河さの揚夜思也く川さり  
軟渡らるる也

右

もをあらし雲のあらもたふかく  
りらうりねらるるもこのあま  
月と雲乃らるる軟く思くも海  
からすも也

十八番

左

いん山阿らしもあ糸たらし中ゆ  
手う先乃いれもあ糸たらし中ゆ  
いん山阿らしもあ糸たらし中ゆ



うぐを年一乃わららひあへて七つは  
契し麻いあへてももや鳴らひし也

二十番

右

夕月目じりてのまのまうあまふ人  
もし起る能くあへてつらう式  
月と日とまじりてはさうじと  
いふもあへて夕陽は福のきも  
あまふとまじりてはさうじと  
杖も海つらうはさうじと

右

うぐを年一乃わららひあへて七つは  
契し麻いあへてももや鳴らひし也  
あまふとまじりてはさうじと  
杖も海つらうはさうじと

廿一番

右

小倉山へはあへてはさうじと



くはよきうすふ四方のる  
定家も小倉の山庄とす  
あも朝毎子後あたる  
ら歌と

右

秋の芳無きもさきも  
お天のくまらぬ  
こしもわらわらうても  
あよ吹くも  
こは有ま

廿二書

右

秋のいぬ遊よ目の  
四の  
冬  
さ  
秋の  
は松

右

秋代とわらわらうの









白妙よりさうお花く雲と吹よりおきて  
越よりよあふ家ららぬ乃まの風  
炭の雪も松乃霜も白妙よ雪まをさ  
と也松をたあらしくお雪を吹ぬ  
とけは誠子のおもかしんすらわらぬ也

右

高妙乃尾上法しりたあう分目と  
ゆもりしとぬらまののまら書  
輝お分たうら吹よりうら高妙乃  
雪と法しりのまらわらぬあし

秋も尾上の鹿乃たのり分目とお花也  
冬より威をまらぬ日ぬ毛松のくさ  
冬ゆりうら松乃雪と玉極松と

廿九番

左

去り秋にお手しりの木家ころ流とも  
しりしおお道しりかえぬ  
木家乃ち付やうお我思おしり  
もやおんと秋く又おいんうら  
あふ雲よりあはる木家いんうら

定房  
三  
文付也我無涯分志わん也

右

霧の類と人志あつたあさし帰舟  
しつらんわお波根と色つきのや  
あさしつれじしし人乃の植ふとを  
我し草乃とくう秋しや也

三十番

左

あまみあれ存のあつたまらし終  
は連あしとまらとあつたまらし終

あいに人きり後まらあつたまらし  
じう無物もあつたまらし  
何れみえ後つらあつたまらし  
きくしつれはあつたまらし  
とあつたまらし

右

あまみ若の三梅み付たつたあつた  
すしつれとあつたあつたあつた  
不逢意のつたあつたあつた  
しつれとあつたあつたあつた

ありとてしらほくの度違ひはしむ  
お糸若きもれん控へ秋くつひ

女一書

左

は酒しくれきしおのささめおのさ  
とすあらむしおのささめおのさ

あらむささめおのささめおのさ  
しおのささめおのささめおのさ

我袖みくらしくれん下おのささめ  
おのささめおのささめおのさ

右

あふらふ袖しはらうの度あつ  
んもあつらふらうの度あつ

我袖しやまの月も早き色た

女二書

右

おのささめおのささめおのさ  
あつらふらうの度あつ

おのささめおのささめおのさ  
あつらふらうの度あつ

女三書

右



おのれも人の我もさあはるる  
うはつとあんなに探しあはれ  
あまのこころあけしきりあはれ  
さよあんなにさあはれ松風乃  
おのれ

左

あまのこころあけしきりあはれ  
さよあんなにさあはれ松風乃  
おのれ

共三書

右

あまのこころあけしきりあはれ  
さよあんなにさあはれ松風乃  
おのれ

乃教也

あ

いふはしるは場乃後事いふは  
いふはしるは場乃後事いふは

いふはしるは場乃後事いふは  
いふはしるは場乃後事いふは

三十四書

右

すみはしるは場乃後事いふは

いふはしるは場乃後事いふは

いふはしるは場乃後事いふは

いふはしるは場乃後事いふは

いふはしるは場乃後事いふは

いふはしるは場乃後事いふは

いふはしるは場乃後事いふは

あ

いふはしるは場乃後事いふは

三十四書

浪の海苔を舟に載せんと胸に  
袖に海苔の敷也

三十一又書

右

わいふ屋のほしむもあつたも  
ねと玉もいふもあつたも  
くらゐの夜の里の道にほしむも  
我すむいふもあつたも  
さむらゐの社もあつたも  
あつたも我胸のうらむも

も胸のあつたもあつたも  
何れもたつたもあつたも  
屋のよふ文字のあつたも  
つけくもあつたも  
我胸のあつたも  
あつたもあつたも

わのあつたもあつたも  
うらむもあつたも

あつたもあつたも

あつちのうらやうに  
うらやうにうらやうに  
うらやうにうらやうに

三十七巻

右

今このときこそ乃橋の若も津  
くさけこちのうらやうに  
とこの橋奥の我流の玉  
ぬかすも緒の糸を  
緒絶たし若さ包は

右

あつちのうらやうに  
うらやうにうらやうに  
うらやうにうらやうに

今このときこそ乃橋の若も津  
くさけこちのうらやうに  
とこの橋奥の我流の玉  
ぬかすも緒の糸を  
緒絶たし若さ包は

右

あつちのうらやうに  
うらやうにうらやうに  
うらやうにうらやうに



こ夢人よ

左

山川のあはれよ海にわたるのこゝろに  
あはれよあはれよあはれよあはれよ

つゆり  
と十九書

左

おれ社もこのあはれよこゝろにわたる  
あはれよあはれよあはれよあはれよ

あはれよあはれよあはれよあはれよ  
あはれよあはれよあはれよあはれよ  
あはれよあはれよあはれよあはれよ  
あはれよあはれよあはれよあはれよ

あはれよあはれよあはれよあはれよ  
あはれよあはれよあはれよあはれよ  
あはれよあはれよあはれよあはれよ  
あはれよあはれよあはれよあはれよ



名をりきい向むまほしむ海つ

あまのれんむまほしむ海つ  
あまのれんむまほしむ海つ

月夜にわらぬ海なれ月吐く  
けら種十月や淡くとみろくん

軍二書

右

あまのれんむまほしむ海つ  
あまのれんむまほしむ海つ

あまのれんむまほしむ海つ  
あまのれんむまほしむ海つ  
あまのれんむまほしむ海つ

右

あまのれんむまほしむ海つ  
あまのれんむまほしむ海つ  
あまのれんむまほしむ海つ



乃繩と云ふ人の極東の島に居たり  
うつらとてより合し繩よりしるす  
とあつたなり人もあつたなり物  
是年あつたなりしなりしなりし  
甲申の事

右

乙卯の年あつたなりしなりしなりし  
わつらんわつらんわつらんわつらん  
あつたなりしなりしなりしなりし  
甲申の事

乙卯の年あつたなりしなりしなりし  
わつらんわつらんわつらんわつらん

右

乙卯の年あつたなりしなりしなりし  
わつらんわつらんわつらんわつらん  
甲申の事



右

くさくさ せせせせ せせせせ せせせせ  
みきく せせせせ せせせせ せせせせ  
せせせせ せせせせ せせせせ せせせせ  
せせせせ せせせせ せせせせ せせせせ  
せせせせ せせせせ せせせせ せせせせ

軍六書

右

せせせせ せせせせ せせせせ せせせせ  
せせせせ せせせせ せせせせ せせせせ  
せせせせ せせせせ せせせせ せせせせ  
せせせせ せせせせ せせせせ せせせせ

右

せせせせ せせせせ せせせせ せせせせ  
せせせせ せせせせ せせせせ せせせせ  
せせせせ せせせせ せせせせ せせせせ  
せせせせ せせせせ せせせせ せせせせ  
せせせせ せせせせ せせせせ せせせせ

四十七書

左

定家公

十一

世の中、成り上りのものごとく、  
いく代の家へあられなく、  
とらん傳へて、  
志の胸へし、  
周防内侍家と賞し、  
捨てあるまを、  
右

さよふ川素朽本れ、  
今より去り、  
山右に揚て、  
右

うろたへく、  
一高朽る、  
軍十八番

あくる朝に、  
しるるん、  
里へ、  
ゆふ付も、  
明ら、  
右

右

〇七二

ねんはあまのすむらひのうたまは  
とてのたのむるもよむるもよむるも  
けりし舟の跡も浪を風うらむる  
うたまはあまのすむらひのうたまは

四十九巻

右

和舟のうたまはあまのすむらひのうたまは  
杉原のうたまはあまのすむらひのうたまは  
あまのすむらひのうたまはあまのすむらひのうたまは  
あまのすむらひのうたまはあまのすむらひのうたまは

我若をしていふ身ごころの早下也身成  
はるるいずれもよむるもよむるも

左

去日やまのりつれみからしたるたて  
身成うらむるの何れもよむるも  
去日山といふ名氏おれしたるたて  
乃とて蘇路は事也蘇路といふ名の  
事の中納言といふ名氏おれしたる  
らぬを中納言といふ名氏おれしたる  
橋はうらむるの何れもよむるも

定家

さくら花物也らにむねつを  
もくわくわくして後次は御  
かしのとちよきたう

春日物乃がらうのりたうれ水  
すまじよ非たうむあらしを

ふし番

右

おとす車しじましつる夏たのむらに  
さよふともたゆわうし系玉の清  
白中戦場のよき世といひかた

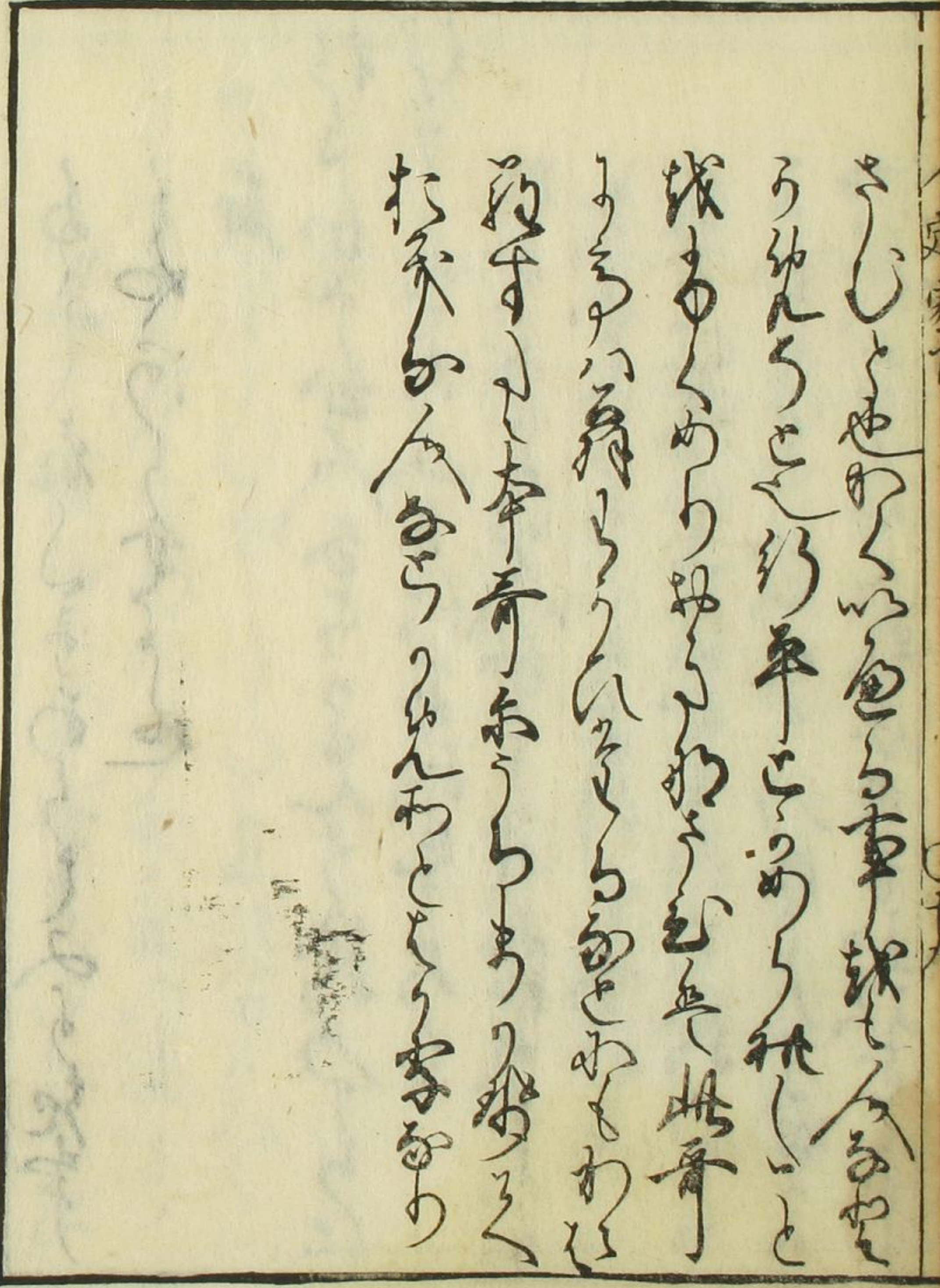
ゆしなむしあらしとよの丸事  
もあらしを

右

ねらふと玉人あらしのせんう鏡乃らに  
じうしをあらゆるはるけ毛うらと

ねらふと玉人あらしのあわのあまを  
きよあらしのうらとをうらと鳴けら  
あらしのうらの子はあらしのうら  
よあらしのうらとをうらと鳴けら  
卯代なうらとをうらと鳴けら

さしとせむくみ色ら車城を今も  
りゆらうとせり平にあり秋しと  
城もくありやんわんむ年此年  
よもやい為らういさくもあもわは  
約すしと本奇あうらもうりあう  
た天のふあうのあうとらうあう



此詩合者於 後鳥羽院御  
遠所 陸波崎 御用者之同定  
給之

御題  
左十八首  
右十七首

合三十五首

延寶四<sup>丙辰</sup>歲中秋日

江戸新兩替町

林九兵衛元芳板行



